



今月の話題

- 中南米地震工学研修 第1回コロキウム「インセプションレポート発表会」
- フィリピン科学技術省火山研究所70周年おめでとうございます
- 人事異動の紹介
- 新任の挨拶
- 林田主任研究員、横井特別客員研究員の共著論文が Journal of Seismology 誌にオンライン掲載

研修データベース

IISENET(地震防災技術情報ネット)

IISEE-UNESCO レクチャーノート

Eラーニング

シノプシス・データベース(修士論文概要)

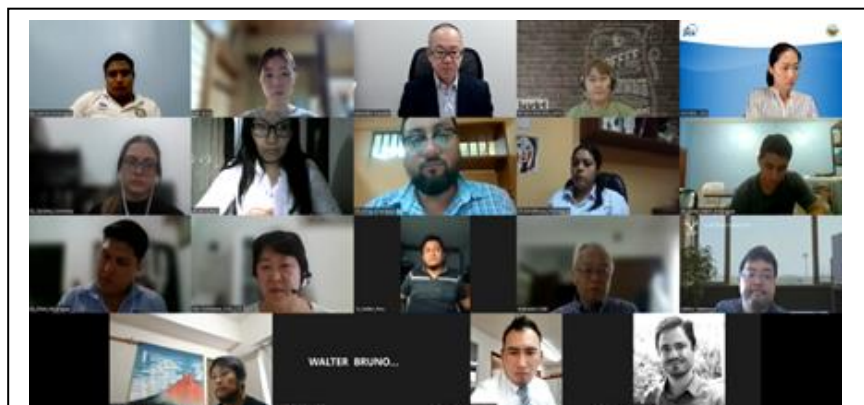
Bulletin データベース

中南米地震工学研修 第1回コロキウム「インセプションレポート発表会」

国際地震工学センター 主任研究員 諏訪田 晴彦

5月12日から完全遠隔にて実施中の2022年度中南米地震工学研修では、5月25日と5月26日に第1回コロキウム「インセプションレポート発表会」が開催され、4か国(メキシコ、ニカラグア、コロンビア、ペルー)から参加している10名の研修生から、自国の耐震基準・耐震化政策等に関する基本情報、自身の所属組織・担当業務の概要、自身の業務における課題、本研修に期待することなどについて発表が行われました。

その中で多くの国々に共通する話題として、耐震基準自体は存在しているものの、技術者不足や管理体制の不備等に起因して、必ずしも基準が守られないケースが少なくないことや基準に準拠していない建物の耐震診断や補強技術が確立されていないことなどが問題点としてピックアップされました。本研修では、単に研修生自身の知識向上を図るだけではなく、こうした各国の現実を理解した上で、改善に向けた研修生自身のアクションプラン策定のためのポイントを全過程を通じてアドバイスする方針としています。



インセプションレポート発表会

地震データベース

2011年3月11日東北地方
太平洋沖地震

地震情報

宇津カタログ(世界の地震被害)

地震カタログ(世界の大地震の震源メカニズム、余震分布等)

論文募集

IISEE Bulletin は、現在地震学、地震工学、津波に関する論文を募集しております。開発途上国に関するものを対象としていますが、それに限らず募集しています。

送って頂いた未発表の論文は、編集委員会と専門家による査読を行います。投稿料は無料です。

是非チャレンジして下さい。

フィリピン科学技術省火山研究所 70 周年おめでとうございます

国際地震工学センター 上席研究員 原 辰彦

フィリピン科学技術省地震火山研究所の70周年記念シンポジウム「科学、技術、災害リスクの低減とマネジメントにおける70年間の進展」が2022年6月21日に Quezon 市 Diliman の PHIVOLCS オーディトリウムで開催されました。国際地震工学センターの地震・津波スタッフは70周年をお祝いするメッセージを送りました。メッセージは、フィリピン国内、海外機関の研究者、職員からのメッセージと共にシンポジウムで紹介されました。国際地震工学センターの何名かはシンポジウムにオンライン参加しました。シンポジウムで紹介されたフィリピン科学技術省地震火山研究所のマルチハザードを含む様々な分野におけるこれまでの成果と発展に強い印象をもちました。



人事異動の紹介

国際地震工学センター管理室長 山田 高広

6月1日付けで、構造研究グループよりの場 萌子研究員が転入され、国際地震工学センターに新たなメンバーが加わりました。

連絡先

IISEE ニュースレターは、IISEE と卒業生の架け橋を目指しています。

ニュースレターへの報告や記事をお待ちしております。皆様の自国でのご活躍をお知らせ下さい。

また、皆様の同僚やお友達もこのメーリングリストに登録するようにお願いします。

iiseenews@kenken.go.jp
<http://iisee.kenken.go.jp>

バックナンバーは 下記をご覧ください。

<http://iisee.kenken.go.jp/nldb/>

新任の挨拶

国際地震工学センター 研究員 的場 萌子

2022年4月1日付けで、国際地震工学センター（構造研究グループ併任）研究員に着任いたしました的場萌子と申します。2021年3月に東北大学大学院博士課程を修了し、2021年4より構造研究グループで勤務しておりました。杭基礎の二次設計手法の開発を主なテーマとして、遠心載荷試験装置を用いた縮小杭模型の振動実験や杭基礎の数値解析に携わっております。至らぬ点も多いかと存じますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。



林田主任研究員、横井特別客員研究員の共著論文が Journal of Seismology 誌にオンライン掲載

国際地震工学センター 主任研究員 林田 拓己

地表付近の地震波速度構造は地震動に大きく影響を及ぼします。微動探査は、地表付近のS波速度を推定するための手法の1つです。このたび、林田主任研究員、横井特別客員研究員が共著者となっている論文（オーストラリアの Earth Insight 社の Michael Asten 博士：元モナシュ大学教授が筆頭著者）が、Journal of Seismology 誌に4月23日にオンライン掲載されました（出版日は1月1日）。本論文では、微動探査の経験を有する世界中の研究者が同じ微動記録をそれぞれ解析し、解析者や手法・各自の判断、事前に与えられた情報や解析ソフトウェアの違いが解析結果に及ぼす影響について議論しています。IISEE の研究者は IISEE のホームページ(<https://iisee.kenken.go.jp/net/?mod=spac>)で公開されているソフトウェアを用いて解析を行い、他の研究者の結果と遜色のない結果を導き出しています。

本論文は以下のリンクから無料でアクセスすることができます。ご興味のある方はご一読いただけると幸いです。

<https://link.springer.com/article/10.1007/s10950-021-10059-4>